

# 新島学園三十年の歩み

——その同志社との関わり——

岩井文男

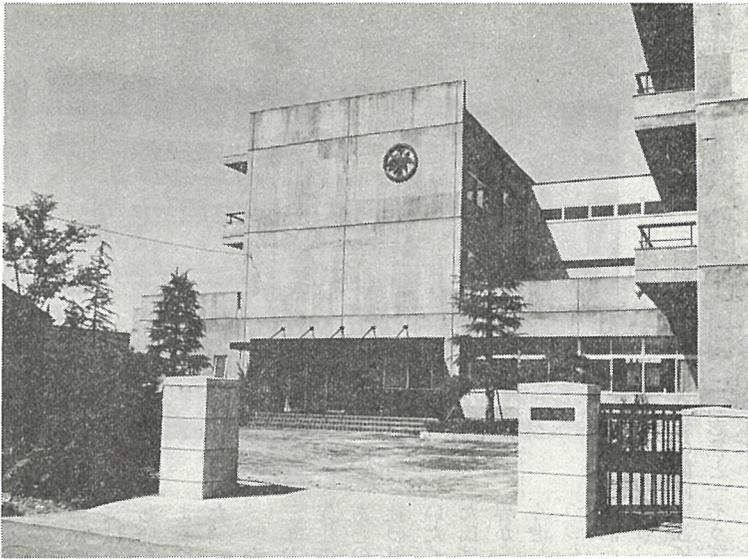
新島学園は本年創立三十周年を迎えました。

創立されたのは昭和二十二年五月五日ですが、都合により、来る十一月十一日（金）に高崎市の群馬音楽センターで記念式典を挙行いたします。

さて、安中市は上州の西部に在り、人口約四万三千で県下最小の市であります。上州も東と西とは気風も異なる点があり、東上州では桐生、伊勢崎方面を中心に、織物その他の産業が盛んで活気がありますが、西上州はまた違った面があり、文化、精神、教育など比較的地味な方面に関心があるようです。明治以来、キリスト教界では新島襄、内村鑑三、柏木義円、住谷天来など優れた指導者が出ております。画壇では湯浅一郎、山口薫、福沢一郎等が名を成しております。上州では俗に安中教員、館林巡査などと言われて、安中から多くの優れた教育者が出ていますが、京都大学元総長荒木寅三郎氏もその一人であります。いろいろな原因も

ありましようが、何と言っても明治黎明期における卓越した教育者新島襄先生の偉大な感化があったことを思うのであります。

新島先生は、安中板倉藩の江戸屋敷で生まれましたが、新島家はもともと安中の郷原（ごうげん）に在り、祖父辯治翁の時板倉勝明に仕えて安中に出て来たわけです。一家は新島先生の在米中、利根川の水路により再び安中へ帰りました。一時妙光院に仮寓（かりまゐ）しましたが、まもなく新屋敷に移りました。翁も令弟雙六氏も先生の帰朝を待たずして亡くなり、妙光院に葬られました。墓域が少し荒れていました。昭和四十八年秋、斎藤理事長と服部庶務部長が来安され、墓域の改装を原市の広袖石材店主（同志社良心碑の刻字者）に託されて、整備し、標識の揮毫は住谷前総長に依頼し、「新島襄先生祖父と令弟之墓所」を建設いたしました。昭和四十九年十二月二十日に住谷前総長が来られて、安中市長、教育長、井殿牧師、加藤妙光院住職、新島学園聖歌隊と教師の有志、安中教会員、安



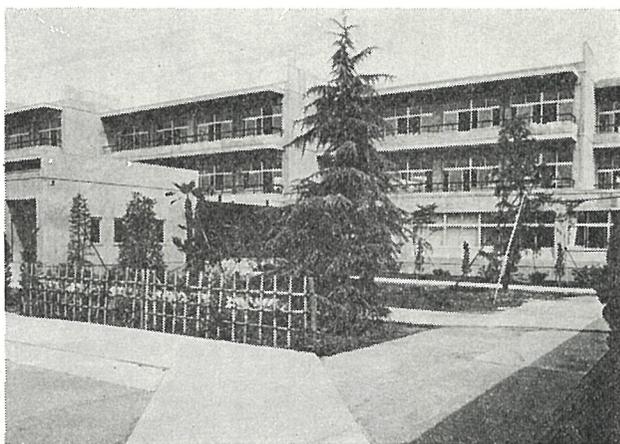
新島学園正門

中在任同志社人、田中省三氏等多数参列して記念すべき除幕式を行っていました。その時の祈禱式文は「同志社時報」五十四号に掲載されています。

新島先生ご家族の住んでおられた家は、久しく他人の手に渡っていました。保存会が買い取り、現在は安中市教育委員会により史蹟として保存されております。この境内には湯浅半月の撰文で新島先生の記念碑があり、また半月の「十二の石塚」の碑もあります。

さて、明治七年十一月二十八日夜、新島先生は、函館脱出以来はじめて安中の地を踏まれました。その夜は山田屋旅館へ一泊、人をして連絡の上、翌二十九日の朝両親の住む新屋敷を訪れました。実に十年ぶりの涙の対面でありました。翌十二月には湯浅治郎らの尽力で、市内の竜昌寺を会場として新島先生帰朝演説会を開きました。安中はもとより、前橋、高崎、その他の方面からおよそ三百余名の聴衆が集まりました。その時の演説の内容は知るよしもありませんが、恐らく先生は、その中で、日本にキリスト教主義大学を設立するとの抱負を、直接にか間接にか述べられたのではないのでしょうか。同志社（もちろんその時同志社の具体名はありません）設立の第一声が安中の地であげられたとも推測されるのであります。

湯浅治郎は、当時郷党のホープでありました。後に県会議長となり、同志と共に日本最初の廃娼県を作った人で、この仕事は、英国のそれに先だつこと実に十五年であります。国会開設と同時に第一回衆議院議員に選ばれました。当時経済通の議員はきわめ



新島学園教室

とともに居を京都に移して、以後実に二十余年の間同志社に献身的奉仕をされました。それ以来、湯浅家は同志社と一そう深い関係をもちようになりました。湯浅吉郎は神学の教授として同志社に教鞭をとり、湯浅八郎は戦前戦後を通じて二回にわたり総長に就任し、特に戦前には同志社の歴史のなかでも最も苦難の責任を

て少なく、この方面での氏の活躍にはめざましいものがありました。

明治二十三年、新島先生の亡きあとの同志社の財政をいたく憂えた氏は、政界からは強く惜しまれつつも議員生活を打ち切り、家族

担われました。その関係を縁戚にまで広げるならば、徳富蘇峰や芦花、大工原元総長もおります。

\*

さて安中と同志社とを考える場合に、安中教会について記さねばなりません。明治十年の夏、熊本バンドの学生たちは、それぞれ各方面の夏期伝道に出発しました。海老名弾生は、独り勉学のため居残っていました。安中教会から夏期伝道の要請があり、新島先生の強い依頼もあって、ついに安中へ来られました。さらに翌十一年二月には安中方面の伝道上の事情があつて、ふたたび新島先生の依頼を受け、学業半ばでまた安中へ来られたのであります。

その年の三月三十日には、新島先生の上京を機に、おいでを願ひ、湯浅治郎の便覧舎(図書館蔵書三千冊)において三十余名の洗礼式と安中教会設立式とを行いました。海老名弾正は、翌十二年六月同志社卒業と同時に安中教会牧師として招聘を受け、正式に赴任したのです。海老名弾正の、安中を中心とした上州伝道は、日本プロテスタント史上にもまれに見るすばらしい実蹟を残しております。安中教会歴代牧師の中でも最も長期に在任されたのは、柏木義円、次いで江川榮であります。

新島学園の創立式は、昭和二十二年五月五日に安中教会堂で、湯浅治郎の孫正次(現安中市長。昭和四十六年四月三十日就任、現在に至る)を中心に、湯浅家の家族、親戚、県下諸教会代表、県当局、来賓参列のもとに厳かに挙行されました。理事長および初代校長には湯浅八郎就任(校長事務取扱は江川榮。湯浅八郎の理事長は現在

に至っております。

第二代校長は柏木隼雄就任（柏木義円長男。柏木校長は、就任十年余にして惜しくも病のために辞任されました。当時私は同志社に在職中でありましたが、招きを受け、昭和三十六年八月に第三

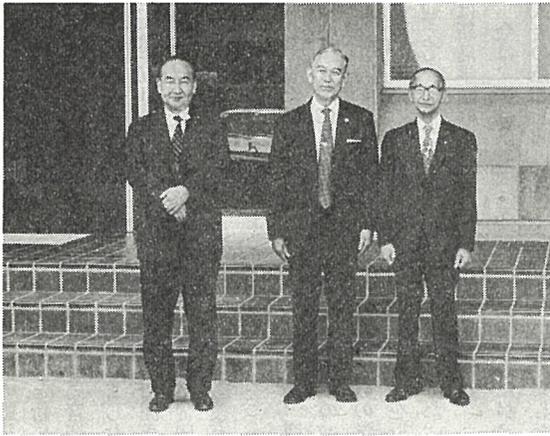
右から 理事長 湯浅八郎氏

校長 岩井文男氏

設立者・現安中市長

湯浅正次氏

（新島学園玄関にて）



代校長として就任いたしました。

顧みれば 学園の創立  
当時は、敗

戦直後で、国民一般は虚脱状態にありました。この状況の中で、湯浅正次が新島学園の創設に当たったことは、大きな意義があります。氏は、郷土の

青年の前途に思いを馳せ、この若人たちのためには、新島先生の教育精神による学校を設立してこれを育成するに如かずと考えました。

新島先生は、申すまでもなく明治の先覚者、教育史上の巨星であります。特に愛弟子柏木義円の理解をもってすれば、その本領は一人の人間の尊厳に深く思いを教し、その尊厳を發揮実現させるために真正の自由を主張された、チャンピオンであるといえます。湯浅正次がこの先生の精神に立脚して、新島学園を興し、若人の行く手に光明と力を与えようとの発想と実践とは、真にすばらしいことでありました。

爾来、学園は新島先生の教育理想を理想として、これを現代に生かすべく、関係者一同苦心の歴史を辿ってまいりました。最初は男子校でしたが、昭和四十三年に共学制を採用、三分の一が女子になりました。また中学、高校の一貫教育を行い、高校は新島中学から二クラス、他中学から二クラスの人数を採用して、四クラス編成となっております。志望者は中学、高校ともに増加していますが、キリスト教主義教育の濃度を維持するため、規模の拡大を避けてきました。従って私学の負うべき教育と経営の矛盾は、つぶさに経験してまいりましたが、幸いに昨今ようやく私学に対する識者の認識も深まり、国や県の助成も逐年増加されつつあります。現在は、真の教育の姿をひたすら追い求めつつ、理事、教師、生徒、父兄、同窓生一体のもとに、いよいよ社会の付託に

応えて行きたいと努力しております。

同志社と新島との現在の関係について一言すれば、今から十年

前に、同志社香里高校の西邸教諭と新島の肥後教諭の出会いに始まり、香里のオルフォイス・クワイヤーと新島の聖歌隊とが「うたう会」の交歓会を作り、隔年ごとに群馬音楽センターと同志社栄光館を会場として交歓を続けてまいりました。第一回は昭和四十六年五月群馬で、本年は第四回を京都で開きました。この蔭には香里高校萩原彦教諭らの尽力をはじめ、同志社女子高の助力、住谷前総長をはじめ郷土出身関係の教授方、新島学園卒業生等の協力をいただいております。

なおまた同志社大学の、神、文、法、経、商、工の六学部において、さらに同志社女子大学の学芸、家政の二学部において、本学園からの推薦入学を許可され、現在多数の学生が在学しております。この八月十日には同大グリークラブを群馬音楽センターに迎えて、約千二百余名の人々が集まりました。当夜の出場者中には新島学園の出身者も加わっていました。

会は、多数県民に迎えられ大成功でしたが、このために群馬県人会の蔭の活躍は目ざましいものがありました。私は、当夜この会に出席して、これほど同志社と新島との連なりを身近に感じたことはありませんでした。新島学園から同志社に学んでいる諸兄姉は、中学から教えれば実に十年間にわたって新島先生の話を耳にし、その精神で全身が染めぬかれていますと言ってもよいでしょう。これらの諸君が新時代の日本と世界に出て行き、それぞれの天分を生かして活躍してくれるならば、何とすばらしいことではあるまいか。自愛自重を祈ってやみません。

さて、創立三十周年の記念事業としては、PTAにより格技場

の建設、同窓生による新テニスコートの拡充整備。学園としては三十年史の作成、その他の事業が着々進行中であります。

式典の記念品については、特に同志社本部の園部部長や大原課長のお世話になり、新島先生の「真理似寒梅敢侵風雪開」の軸を作りました。

学園関係者は、三十周年記念式を機会に、さらに思いを新たに  
して、いよいよ学園教育の真の姿を追い、この時代を担うに足る  
若人育成の使命達成に努めたいと、祈りを深くしています。安中  
の地には、新島先生の愛弟子として、非戦の筆と救霊のわざにそ  
の生涯を燃焼しつつし、眠れども今なお生きて語りつづける柏木  
義円と、そして神学に、詩に、音楽に、絵に、多彩な才能を発揮  
した同志社人、半月湯浅吉郎とが骨を埋めております。

静かに耳を澄ませば、いずこからともなく同志社先人たちの叱咤  
激励の声<sup>なげ</sup>が耳を掠<sup>かす</sup>めて聞こえてくるようです。やはり安中には  
同志社人の香りが漂っています。同志社へもまた、安中からの良  
き香りを送りたいものと念じています。

昭和五十二年九月二十三日

(新島学園中学・高等学校長)

